

# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2023.11



## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものと同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地 中 海

一〇三年十一月号 (通巻七八六号)

◇今月の二十首詠……空遠く

■作品[A]

三木まり・宮本靖彦他

A

松井みね他

4

B

茂木静子他

46

C

もとむらゆみこ他

56

小泉澄子他

70

光広祥子・森川淑子他

36

改正大祐・堀口良雄

16

◇今月の二人

私と短歌との出会い (255)

西畑睦子 19

今月の二人・作品評

■鑑賞・三好直太の歌

4

〈内在〉

久我田鶴子

15

送風塔

松谷公汪

61

久我田鶴子 18

■

〈第一歌集を読む〉

8

田土成彦歌集『遠隔会話』

阿藤たつる

最近の歌誌より

〔編集部〕

81

■

（背春の形見）

1

——「青春の形見」

クリップ……82

神田通信……表3

〔編集部〕

61

■遊覧寄港 〈望郷〉

山下和子 44

c h a t G P T と短歌を

柴田登志恵 45

■九月号作品批評

62

A

・関根和美・山本 孟

66

・岩井久美子・宍戸千佳子

66

B

・桃原佳子・酒井治子

66

C

・永塚節子

66

オリーブ集

・横田敏子

66

◇シルクロード・カフェ――――

【責任編集】木村文子

42

(表紙デザイン) 佐藤義典

# 空遠く

鈴木 文子

昭和十九年生まれ。  
「眞春の会」所属。  
歌集に『西窓の彼方』がある。

街路樹のみどりの木陰はなやきて老奏者らの奏であるジャズ

佇みてジャズ聞く少年スニーカーの爪先とんとんリズムを刻む

街角にジャズのスイング流れるみちのく仙台<sup>ひたち</sup>父の古里

わが町に店舗構へし外国人シルクロードの料理あきなふ

ラグ麺と柘榴のジュース夫と来てシルクロードのランチ味はふ

空遠く迷ひ舞ひ来し紅<sup>べに</sup>とんぼわが住む町の梅雨の川辺に

長き坂下り来て梅雨の川の辺に鴨の親子の散歩に出会ふ  
ふはふはと煙のやうな花の咲く大樹の道を帰る夕暮れ

空海の生誕祝ふ山寺に僧侶の読經ひびきわたれる

空海の生誕の日に重なれる水無月雨の父の命日

暮れゆける空の彼方のその色に春りんだうは天向きて咲く

北国<sup>ほくこく</sup>の海辺に近き湿原にひそやかに咲く真白きすみれ

短冊にそれぞれつづる願ひごと毎にゆるるをそと読みてみる

夕菅<sup>ゆふすげ</sup>の花ひらき初む丘に見ゆ海の彼方に沈む夕の日

提灯の明かりゆらゆら神輿ゆくいのちかがよふ古都の夜まつり

水無月の月の光のあはあはと魚すむ池の水面を照らす

なつかしき友に便りをしたためぬ文月ふみの日大暑の朝<sup>あした</sup>

「ああさう」と鳴くカラスるて公園の嫗の会話に相槌を打つ

「さやうなら」「また明日ね」と子らの声一番星のまたたくタベ

「さあ肩の力をぬいて楽に楽に」空遠く亡母<sup>はは</sup>の声聞こえくる

# 作品 A

## 三木まり

仰ぐ

・昂

今を語る蟬の熱唱鳴り止まず瀬戸の夕なき酷暑はつづく  
地を走る小鳥が止まり首かしげ何を想うか酷暑の夕べ  
路地裏の陰を選んで歩き行く酷暑の晩夏せみしぐれ降る  
ひと恋えはひとの気配がふと通り振り向く空に夕ぐれの月  
路地裏にニイニイゼミが仰向けの足を動かしやがて止まつた  
住む人を失くした家は窓という窓に兩戸が 夕やけ小やけ  
誰よりも愚かで哀しく誰より賢い人よクラウン踊る

## 宮本靖彦

千里川

・凌

朝ごとに二ヶもぎとり熟れトマト盆迎への今朝収穫終る  
採り終へしトマトの木にも感謝水やり続けしが今夕で断つ  
七号被着テレビに見つつ盆迎ふ七十八年前の晴天想ふ  
若落葉散りしく学園透し見る夏の夕日が輝き沈む  
野末なりし墓群宅地の真中にて盆の香華ののこり香子<sup>とおこ</sup>之し  
夕焼けの雲が暑さをやはらぐる毎日散歩のお稻荷まるり  
葛おほぶ飛石づたひの千里川香川師ここに足浸されしか

## 三好聖三

青柚子

・茨

それぞれに押さえる位置が違う故ぐしゃぐしゃ歪む歯磨きチユーブ  
東京へたびたび出かける娘の背中行くのをやめた苦が見送る  
死に急ぐつもりはないが出来るなら人と会わずに暮らせぬものか  
うらおもてなきひとの声ありがたく意氣をいただくこの夏もまた  
山形にかかる縁を聞きている美味桜桃を賜りしどき  
うかつにも後引き豆を食べられて防鳥ネットをめぐらす九月  
柚子胡椒を作ると妻がのらすゆえ青唐辛子・青柚子を探る

## 御代田澄江

地上の戦

・茨

マイナンバー新たなるミス何件と聞きたても驚かぬカード持つは任意にて  
仙台七夕通り埋め尽くす人波の中に入らず遠くより見る  
顎マスクの人と行き交ふ暑き朝コロナ五類へ移行せる後の  
共産党は無くなつたらいいと公党代表の言中学生の如  
地球温暖化の時代は終り地球沸騰の時代来たるの発表ありぬ  
原爆に絶たれし未来に着る筈の〈肩上げ〉深き衣の少女麗し  
宇宙飛行士称揚せぬにはあらねども地上の戦止むるが先ぞ

茂木 威 ハマユウ

・埼

江ノ電の窓に過ぎゆく藪のなかハマユウの花束の間に見つ

午前五時いつもきてゐる朝刊が遅れて届く土曜日の朝

いつこより飛びきし種か門口に高砂百合の二つ目が咲く

新刊に読みたき本の無きときはわれは「日本の古本屋」開く  
ラスキンの『ヴェネツィアの石』読みたきが高価にあれば購入押せず  
センダイムシクいまだ知らずも白樺の林の朝に聞きたきものぞ  
南蛇井の駅に群れ咲く翁草かの春の日もただなつかしく

もとむらしげと

心

・そ

青くさき怒りに駆られ万年筆を叩きつけし日の心の若さ  
嫌わるる勇気をもてと叱咤する本を読みいて深夜に至る  
やわらかき心の人と思ひけり握りたる手の温みに触れて  
一匹の蝶を手に取り逃がしたる今宵のわれは性善のひと  
ボールペン滑らかなるも幸せの一つなげり手紙書くとき  
ゴーゴリを語れる人と隣りあう教師四十年初めてのこと  
ささいなる誤りをさも大仰に指摘したりき教師の我は

桃原佳子

事故

・沖

リハビリの病の種類は様々で通院して知る他人の暮らしを

二十歳頃本で覚えし鰐のマリネ今も愛でつつ夕餉の卓に  
眠るのに惜しき晩なり今日一日家事をこなして心明るむ  
トンネルを抜けてトンネルまた抜けて田浦の御立岬に着く  
空に舞う鳶の声の懐かしく夫と眺むる故郷の海  
もう間もなく自宅到着寸前に一時停止せぬ車とぶつかる  
衝撃で車の前面大破するシートベルトで命救わる

牧雄彦 五山の送り火

・大

午後八時五山の送り火点火さる炎と煙が斜面を奔る

東山大文字にいま火が燃せて祖の御靈と夏が去りゆく

姉の墓は東山に真向かひて墓碑に添ひ立ち送り火を見つ

火の燃ぜる音がかすかに聞こえくる炎と煙がいきほひを増す

姉逝きて五年の時が流れたり姉の御靈よまた還り来よ  
だんだんといきほひ失せる送り火におのづから手を合はせてゐたり  
すこやかに生きて来年も見にくるよ姉に告げつつ今は帰らむ

松浦楨子

岩絵の具

・羊

犬をつれ宿泊叶う世となりて誘いに乗りぬ草津湯畑

この人のよき絵ありとぞ教わりぬ片岡鶴太郎美術館まで

空色の短冊の端よりすと立つ花菖蒲一輪むらさき匂う

姫郭をおぼろに散らす岩絵の具傾く壺に牡丹三輪

「ぬす人に取りのこされし窓の月」良寛の句を短冊にして

春夜桜夏は桜を染めあげて空氣もおぼろ四曲屏風

いさきよき鯉の一世に心寄せ自ら名のる游龍龍門

松本多摩子

娘と二人

・桜

娘と二人有料花火の初観戦傘寿の夏に酔いしれる夕

児童館雷雨に子らの大騒ぎ上がり上がれば虹にまた大騒ぎ

一瞬にさぬき多度津が映りたる朝ドラ牧野の四国旅にと

無理するな傘寿の日々に子らは言ふ一人暮らせば無理はつきもの

一週間娘が連れてきたヨーキーの足音とことこ耳から離れぬ

砂浜にカニを追いかける犬それを追いかけ娘は走る

ローブウェー上がり先の雲辺寺子供通路の眞言ひびく

## 三浦好博

毒の水

・鈴

蒸し暑き夕への空気に撒く水の金糸銀糸が煌めきわたる  
 巨大化する人道雲の底の辺に玩具のやうなあまたの風車  
 ワイシャツの背を膨らませ自転車の高校生よ我我が子らも  
 三Kも新三Kも死語ならず富裕層には四K八K  
 猶りたいわたつみの魂にぶつかけるデブリに触れしああ毒の水  
 減税は意地でもせぬが税金の無駄遣ひばかり思ひつゝのよ  
 蟬時雨に午睡を覚めて急かさる取り敢へずやること思ひつかず

## 山下雅子

瑞穂の国

・習

処暑過ぎしに続く猛暑を喫く文瑞穂の国の今頃しのぶ  
 暖化や水の不足に枯れ枯れの田畠映りぬ日本の今が  
 蝉鳴かず蚊にもさされず蟻も見ぬこの夏われの風物詩消ゆ  
 嘘声の上がる甲子園三年ぶり活気と熱気の坩堝にひたる  
 走りこみナイスキャッチの三選手土まみれなるあの身のこなし  
 あかときにJアラートのさわぎあり無事なるわれらいかにせよとや  
 八人の孫やひ孫の産声を聞きし産院一代目灯る

## 山野幸司

糸崎鉛

・沖

そよそよと雑ぐ草に寄る糸端始切なく悲し戦争続く  
 青白く輝く器陳列のケースゆつたり皇帝の物  
 世に不二の秘色青磁の器あー君は命を我に呉れたり  
 今日も又ゆつくりと舞う鳥の田に厚き視線の先には蛙  
 蛙を行くわが足取りの重々し草丈ばかり伸び夏過ぐ  
 緑々の我の田んぼの草丈に溜息ばかり空仰ぎたり  
 計画のなき農作業拂らず天地の間に横たう仏

## 山本孟

居間

・大

居間にすぐ便所こそあれ、ウォシュレット。つい昨日まで廊下の先に  
 リハビリより帰れば軽き疲れありソファーに深く沈みて眠る  
 夜遅く独り身の風呂をシャワーにす今日の暑熱はまだ冷めやらず  
 友は死に妻も亡くなり最後までわが友として応へる蔵書  
 読みさしの本ありながら読みそそる新刊に手が、また購ひぬ  
 小さくとも過ちを悔い消えざりき朝起きざまのこむら返りよ  
 役柄を変へても同じ彫り深き面の國村隼の演技は見もの

## 養学登志子

シシクウカ

・凌

聞きなれぬ地方言葉は「スシクウカ?」桶より重石上げるのを見き  
 蛇に重石?驚きの味は忘じしが粽のよう長き葉くるくる  
 以後みやげは馴飼となり早馴とうやさしき飼飼ありしこと知る  
 八寸の一口大の巻鮓いつよりか消え飼のうす切り  
 河原町に一軒残る鮓どころ美術館帰り立ち寄るコース  
 月一度歌会帰りの節買うてひとり食すはもったいないけど  
 魚屋の鮓はいずれもなかなかに今宵の皿は桶円のグレー

## 横田敏子

雪を恋つ

・福

眼が乾く心が乾くカラカラと身も乾きゆく真夏日続く  
 台風の標的となる国にして線状降水帯いすこを製う  
 あんなにも好きだった太陽この夏は嫌いになりぬ 日々雪を恋つ  
 亡き義姉のリボンの付いた夏帽子すっかり黄ばみ今日でさよなら  
 水打ちて涼しき庭の夕暮れ生れたる風にこそ秋揺れる  
 歳月は皆平等に巡り来て七十代を卒業したり  
 ひつそりとピックムーンは昇りいて波れし友は見てるだらうか

吉永惟昭 ゆりかこの詩

・熊

早よ急げ大波瀾の伴が事故四年振りなる恵津湖の花火歩道まではみ出す列の停留所市電の軋みゆりかこの詩  
着せられた拾<sup>ひ</sup>の温み随兵を見学したる日を思い出す  
夏過ぎて突然寒波の肥後襲う隨<sup>つづき</sup>兵<sup>ひ</sup>寒合と呼びてありしが  
あきらかに鎮守の杜の淋しかりあつと言ふ間に秋風のたつ  
リハビリの勝てばこの月半ばには退院といふほうびが待つ  
リハビリとしょんじょん比べ老衰の負けてゆくさまありありとみる

磯田ひさ子 ねぢ花ふたたび

・森

遠巡の十二年経て汚染水が処理水として海に流さる  
傷深く沁むことあり後戻りできねば前に進むほかなし  
音もなく海にまきるる処理水の三十年後 幸くあれかし  
「ねぢ花」を友詠みくれし ああ夫は天に昇ったと少し安らぐ  
六度目に渡日叶ひし鎧<sup>よろ</sup>るのはなしに少年ことば少なし  
法のため命をかけし鎧真のゐたる事實に直立したり  
わかくさの夫の遺影の笑む部屋に宿題勵む少年のゐる

市原やよひ ほおづき

・萬

ほおづきの庭に色づき盆花に添えて飾れり灯を待ちながら  
つばめ来ぬ今年の夏の贈り物ひよどりの巣と鳩の巣出来て  
ひよどりの子育て見たりビーピーと声のみ聞こえ雛を動かす  
帰りたいという人が居るからと病棟入口ベッドが塞ぐ  
帰りたいという人妻や夫にも欲しき一言「帰りたい」  
目を開けぬ夫に只管話しかく聞こえているとただに信じて  
制服の少女の一團服やかに通り過ぎ行くああ二学期だ

梅本武義 乾布摩擦

・羊

夕暮れの蝉の声聞く散策は孫にもらいし首輪で冷やす  
ビール手に寿命を思い夕暮れの里を見渡す法師蝉鳴く  
にじみ出る汗が刺激の背の痒さ乾布摩擦を熱帯夜にす  
歌会より帰る左折の交差点真っ直ぐ行きての違反忘れず  
連日の猛暑も雨の一日にて夕への庭に虫の声湧く  
恵まれた里と思う夜雨風のほどよく遠く台風が行く  
防御のみ攻撃できず歯軋りす猪憎し憎しブーチン

大浪美雪 地名伝説

・森

上総国「吾妻鏡」に記載なし隙間を埋める地名伝説  
百騎、千、万と増えゆく坂の名に頼朝軍の勢ひを見る  
ありあけの月日々と残りをり靴紐を結めいざ鎧倉へ  
頼朝の戦場といふ（池田の池）ビル街となり今われの立つ  
大泉洋の演じし頼朝の気分で渡る（君待ち橋）を  
石塊や矢玉の降りきし土壘よけ日傘を盾に城跡登る  
五輪塔の空船宝珠の形なく名もなき石に還りくづぼる

奥田陽子 鳴姫

・羊

あまたなる蟻穴を踏み登り来し小高き丘は風通る路  
百日紅散りきたりまた散り落する小高き丘に風吹きやまず  
やわらかな光こぼせる梢の上わずかに形崩す雲ゆく  
みんなんの鳴きつのりいて寝ちかし淡紅の花散り敷ける丘  
目前の前をやせし鳴姫のよきりたり検査結果を聞き帰る道  
シユワシユワの炭酸水をもとめたり長距離来たる額に置かんと  
きれぎれの夏の睡りに入りてくる風と鳴姫と一瞬のこと

## 小野雅子 坂

・羊

## 菊地栄子 四つ葉

・海

救急車のおと日に幾度この坂を下りて総合病院へ行く上の道  
右からも左からも横からも坂下るために入る救急車

幼稚園に通ひし道はいま校の名所となりぬ播磨坂なり  
实物を見たことのなきスマートリー テレビ画面の端に見つける

ポケットのハンカチ確かめいざ行かむ酷暑の日でも食べねばならず  
草の丈伸び夕風になびけども涼しさは来ずこの長き夏  
四年ぶりなる集まりの通知ふたつ もちろん選ぶのは「地中海」

## 上林節江 連刷ならねど

・鷗

午後の二時、西にま向きてパワー送る 開い制しふたたび旗を  
8対2無情にスコアは確定し宮城の夏がしずかに終わる

連刷にはならなかつたがいいものを見せてもらった 青春の熱  
みちのくに咲くコスモスの花飾り編んで球児に掛けたあげよう  
健闘の球児に負けざる熱われに!天寿百年の世を見てみたし  
「仙台は暖かい街、去年よりも負けた今年に出迎え多い」  
ススキの穂白くうぶうぶと開き初めみちのくに秋そよろ近づく

## 神田鈴子 終戦の日

・大

広島の空に澄みたる子らの声核兵器廃絶を懸命に訴ふ

幾百万の犠牲の上に今がある心に沁むる終戦記念日  
七十八年目の終戦の日よ台風のさなかに今のは和かみしむ  
火の粉降るなかを逃げたる幼き日いまウクライナの子らに重なる  
この暑き朝を草刈る人ありて礼すれば白き歯がこぼれたり  
日毎受くるメールは声のぬくもりを伝へて今日のわれを励ます  
青々と澄みわたる空どこまでもわたしの歩む道はつづけり

## 草刈十郎 人生百年

・世

すべりゆく風をはらんだヨットの帆太陽に胸張りたることく  
夏空と木々の縁を映す池鬼やんま飛び交ひし少年の日よ  
少年の日々みな遊びる昭和を語る路地も消えたり  
青春の思ひ出ページの主役たち思へとすべて故人となれり  
夢のまた夢なのなれど八十億一国となり平和な地球を  
大空も大地も人も青く燃え暑さいや増す七月となり  
入道雲人生百年時代なりわれも目ざして生きむと思ふ

振り花鏡に映れば六本に 子供御輿が通りてゆくよ  
もじやもじやのバー・マネットに見えてくるカナメモチ若葉の燃えたつ深紅  
木刀が飛び出てきそうな緊張感暮れて留守するドア開けるとき  
惚れ惚れと黒き車体が映し出す咲き極まりし石榴花のはな  
隣家がもたらしきたるドクダミを腰を下ろして引き抜きはじめ  
半世紀団地に暮らしてひそやかにスーパー・歯科医院閉じゆくを見つ  
クローバーの咲きいる凧いそいそとまだ見ぬこの世の四つ葉をさがす

## 北山雪男 葉月抄

・伊

八月は鎮魂の月 其處彼處またかな吳き今年は特に  
戦場に行かぬ政治家勇ましく「戦ふ覚悟」を煽りて恥ぢず

買ひ出しのリュック背負ひて帰館せり明日は戦中、かもしけぬ夜  
碑、否(慰靈觀光)なる言葉耳をかすめてとほき沖縄  
喫茶店はアメリカ資本の味を避け地産地消の香りかなしむ  
独り言つ時代音痴の怨み節ノンアルコール・ビール睨めつ  
蝶の声聞かず過ぎたる一夏なり輪廻転生跡切れし異土に

## 河野繁子

算用

雁

二、三本咲きては消えし時かけて葉月の庭のキツネノカミソリ  
土の中で順番まつは何の順人は暑きとアコンの部屋  
朱の色のキツネノカミソリ長年的心癒せし 連ドラ「らんまん」  
姉をこえ伸びヒゴタイ花咲けり道行く人には触れぬ算用  
窓のそば芙蓉の木にいる蛙との同じ目線で机に座る  
一円で買えるスマホと広告のしつこく届く老人の家  
QRコード開けず一品の少なき夕食我のみが知る

## 小林能子

希望

羊

耳近くふいこの音を聞くことしその死を伝ふ電話を切りぬ  
「すすめ」の子の孫歌会を愉しむは高齢便り 松明けのころ  
神のみぞ知る明日の世界 希望持たうよ「特養」からの最後の電話  
わが子以上にはできぬと断りベトナムの女子受験生ふたり預かる  
人の輪をアジアに結びひとはいま妻と「鶴神楽」の木の下に  
いきものがあまた自在に巡らせるKODUEハンカチ握りしめつづ  
「ほほ日」に記す一食一食の愉しみありて孤食と謂はず

## 近藤栄昭

白内障

虹

術前の告知に失明おびえいる点字ブロック外に出れるか  
医療事故ゼロではないはどこか消え時間に押され確認署名  
収骨の灰に形はすでになく煙となるか眼内レンズは  
水晶体がプラスチックに置き換わる光の中に碎かれている  
眼帯の外よりもれる薄明かり妻の手さぐる帰りの道は  
一つ増え次はどこを人工物が多いなんとか脳を

白内障手術の効果明らかに裸眼で通過免許更新

## 近藤芳仙

農耕謡歌(三)

信

幾時代の勞をねぎらひ酒と塩 古き屋敷の土蔵をこはす  
ここに生きし祖先のことを想ふ日は伐りし胡桃の樹液オレンジ  
春くれば理由なくはづむ心持 土とふものをはなれがたしよ  
若きらの繼ぐ日夢みてうゑてゆく柿・梅・杏・キウイの雌雄  
烟の面に根付く苗木は末の葉をのびたる草の間にのぞかす  
この夏の猛暑と雨にのびし雑草 銀と鎌とに日日たたかふも  
青柿の青葉に硬く實りる防災の日の空すけてをり

## 坂上直美

地球沸騰

天

山は燃え海は沸き立ち風は荒る いよいよ近づく滅亡の時  
震えつ恐竜たちは死んでいった暑さのあまり人間は死んだ  
「どれくらい歩けば水が飲めるの?」と小さな象が母象に聞く  
赤茶色黄色がやたら減っていく未来世紀の絵画教室  
「この色は何に使うの?」「空の色」未来世紀の絵画教室  
小さくて青い星だったその昔減びていったなぜか知らない  
ごらんあれが先祖が住んだ地球だよ昔は青くきれいだったが

## 坂出裕子

むらさき

洛

旅に出る子に託されし鉢植ゑに心をこめて水やりをする  
大切に子が育てる鉢植ゑは子の分身のやうに思はれ  
子がそこにある子の声が聞こえてるやうな気がして水やりをする  
炎熱の酷暑の昼を庭の辺に桔梗ゆれをりむらさき涼く  
庭の辺に搖るる桔梗のむらさきに涼をいただく炎熱の日を  
炎熱のひと日の夕べむらさきの桔梗の花に水やりをする  
涼し気に庭辺搖るるむらさきの桔梗の花に秋をいただく

## 佐藤道子 夏

・甲

この夏は異常な暑さと思ふのにニューノーマルと言ふ人のゐて  
高崎山から来ると噂の猿の群浅間山麓いづくへの避暑  
我が屋根に星寝の子猿が歩みゆく子猿の手足は意外に長し  
我が家廻り調べてゐし猿が子猿のあとをゆつくりと追ふ  
山道にはつたり会ひし若鹿の毛並の滑さにしばし見惚れる  
羚羊が一頭森の中にあるて樹になりすまし微動だにせず  
咲き初めし道の辺の花を手折り来て秋の花野を想ふひととき

## 篠原まり子

また違う日まで

・羊

温暖化の日日過去となり今はや「地球沸騰」の文字におののく  
とくだみは湯には非ず炎天に「雪の下」とう花の静けさ  
点滴のコードに繋がる暫しをの水を欲しがる夏の草ぐさ  
置き去りの小鳥は籠でチイと泣く涙は出さぬこころに涙  
唐突に友の計報は逢えぬまま過ぎ去りし日日悔しきはコロナ  
仏像の切手を貼りて黄泉地へと出す便りはも「また違う日まで」  
胎内に二ミリのいのちを孫は告ぐ愛しきものに生かされて今

## 柴田登志恵

七日

・天

殻を抜けさみどりの翅広げしにまなこ見開き熊姫凝る

明けはじめ熊姫しげ鳴き目覚めるて生命かがやく星と思へり  
われを今朝二度打ちをりし熊姫は鳴きつつ飛びぬましぐらに飛ぶ  
明け前に蟬は小さく鳴きはじめ暑さともなひいや増しに鳴く  
街の音さへきり蟬は繁く鳴き炎夏の天下わがものとせむ

飲まぬまま食はぬままに鳴く蟬のしまらくまどるむ真昼の網戸  
日の中の熊姫の七日永からむ力尽くして果てるむくろ

## 須川千恵香 卒寿

・眉

若き日のエプロン見つけ掛けてみると卒寿はよそにきりつと背筋  
うつぶきて苧環咲けり戦国の義経を恋ふ舞姫の詩に  
鉢植ゑに苧環増やすむ發芽待ち似かよふ三つ葉に枚挙遊ばれ  
苧環が卒寿言祝き一面に芽吹くプランター夢かと見入る  
病みてより起き立ち上がる此の動作透析の後人の手借りぬ  
卒寿歳心は若く出来ること深め行きだし余力の限り  
前向きに生きたし卒寿いつしらに去りし身めぐり殊に懐かし

## 鈴木結志

自制心

・福

永存の一途によなくふでとりておのがうつし絵書芸にむすぶ  
うたを詠み真意ことさら自制心もっぱらにして生きをつらぬく  
こころあらば自分自身を見つめよとう千金よりも重き言の葉  
書芸生むふでにみなきる一途さよおのが力のひとりでにわく  
温にして線質艶にひとめひく右衛門切れの寂速の書  
かな文字の連綿帶のつなぎ技天地の有情加わるおもい  
西行の「白川切れ」の書鑑倉風ながれ連ねん躍動に富む

## 関根栄子

風景

・埼

ばらばらと突然の雨街中のように駆け込む軒先はなし  
小走りになりて行く道つば広き帽子に出で来て幸いなりし  
青空の見えいてこの雨間なく止む抱えしバッグをハンカチで拭く  
故里へ何十年ぶりかバスで行く車の頃は風景見ざりし  
車にて長年見過ごしいたりしよバスの車窓の風景鮮らし  
旅者のような気分にバス降りて実家の方向へと歩き始めし  
この暑さいつ迄続くと思いつつと見上ぐれば行合の空

関根和美

炎暑

・埼

滝田靖子 八月

・新

コロナ禍の三年長じやなお長く酷かりし八月十五日まで

職前に似たる世相と亡き母の嘆きし金具の失せゆくファンション  
とべぬままサッシの欄にはさまれて朝に雀の子は息絶えぬ  
散水機シヤワーードに丹精の鉢をうるおす朝なさの夫この夏のわれの定番どくだみと麦茶のブレンド沸かして冷して  
めぐる虎とけてバターになる童話思いつ急ぐ炎暑のなかを  
若からぬ肌をさらして短パンとランニングシャツに乗りきらんとす

高尾恭子

祈り

・大

この夏を友はかえらず西門のそばに無人の表札道す

ひゃくにちの夏をほろほろ花は散る新聞やめたワクチンやめた  
孟蘭盆の蝶声すでにしづかなり思い出し笑いの灯明ゆれて  
天と地のあわいに在りてたなごころ合わす形の空蝉ひとつ  
炎天をとよむ熊蟬もういいよ格差・過労死・核のお荷物  
雷に打たれた樟の幹ふとく洞に百円硬貨がひかる

七つ坂のぼりくだりを下駄が鳴るじゅりん子チエに出会う宵宮

高津砂千子

絵手紙

・風

亡き兄の忌明け法要家族のみになすとし聞けば言葉のあらず  
絵手紙のオクラの花のやわらかさしばし眺めて暑さ忘るる

盆過ぎて残暑見舞を投函にゆく道せみのむくろが六つ

真夜覚めて作りしあははどこへやら逃げし魚は追わずにおこうか  
炭焼きのコーヒーというは初めてぞ友にならいてわれも頼みぬ花の絵の異なるコーヒー・カップにも語ひるがる茶房のわれら  
合田草カラカラと鳴るまぼろしの音とし聞こゆ果たせぬ夢の炎天に蚯蚓の死骸の乾きて道端にも死は転がつてゐる  
蚊には蚊の命があるなど思はねば躊躇ひもなくたき殺せり  
おのが身を害するものへの残酷に気付かぬふりの蚊遣りの煙  
伯母逝きてあの世に家族の揃ひたる今年の盆を帰らぬか父は  
広島の願ひ長崎の祈り八月鎮魂の花火があがる  
八月を遠き花火の音のして見えない空に聞く火の花  
藍色の空に咲く火の花を見よ死者も生者もかきませて夏

竹下妙子

桐

・霧

夏の夜を命みじかく燃ずる花火虚像いつまでもわが裡にあり  
茂りたる桐の葉あはひをぬけてくる七月の風背き香をもつ  
言ひ得ざるわれにあれども詠あれば詠にし依りて心癒さる  
夕太陽がいま沁みたる部屋のなか温とさなほもわが裡にあり  
冬切られし桐が小さき葉を出せりまぎれもあらぬ掌のかたちして  
きらめける焰にさらさんわが想ひ何に恋ひるし心にあらむ  
背な曲る姿ガラスに映りる雨ふる宵の秋の色はも

田土成彦

汽笛

・宙

ダイオウイカの大きな目玉は暗黒の深海で何を見てゐたのだらう  
荒れ地のにアレチノギクが散るといふ月の出しようの寂しさのなか  
冬軌条のはては銀河につながりて汽笛のやうに鳴る虎落笛  
実らない卑弥呼の恋のゆくたてにはたり蓑笠に椿落ちたり  
アマテラスは卑弥呼がモル古代史に神話のやうなひとときもあれ  
クニトコタチノミコトがよみがへる明治中期の混沌の中  
アマテラスは元来男神であったとか隠蔽すり替へはいつの世もある

## 田土才恵 指

・宙

無花果の大葉に揺れる抜け殻も今年の猛暑を生きゆく証  
猛暑日のあした睡蓮の鉢に来て水飲む蜂に遺る水もある  
待ちいたる今年のヤモリ北窓にみつけて小さき歎声をあぐ  
雨降らぬ宵の玻璃戸に花形のあなうら見せるヤモリと対話  
粒々の五つの指のヤモリ来て張り付く足裏眺めて飽かず  
一匹のやもりと会話をした今宵優しきこころふと湧いてくる  
小さくとも虫を捕らえし細き舌ヤモリの口元ひらりと動く

## 玉井綾子 夏休み

・森

水平線のこと四十日を見霧かす七月中の中学生は  
中一の子の読む本を探す夏、作家のア行から進まない  
毎日がのび太のママだ夏休みクーラーの部屋にゆるむ子見れば  
熱帯夜記録更新される中ロングTシャツにあらねなき足  
泳ぎたくない子の言い猛暑日に物見し水浴びほとの汗かく  
夏休みの宿題やらぬは子の勝手…とも割り切れず胃の心みる処暑  
夏終わりクリーニングに服を出す来年も着ると疑いもせず

## 中島央子 八月

・森

亡き数のともがら十指に余りたり老いには辛き熱暑はつづく  
暑くとも蟬の鳴かない夕方明日は立秋日めぐり捲る  
枕頭の書の一冊を選る夜更け聲の終り見えぬ八月

夕立が一瞬樹々をかすめゆく検診結果が気になつてゐる

食事終へひと時横になる吾に声なく寄り添ふ小犬七歳

シニアたちマスクの頬に手を添へて力をこめる「ベビーベベボ」  
たちまちに一日は過ぎてたちまちに「月終はるそが中に生く

## 永田進一 友垣

・山

百日紅枝の下には蜘蛛の巣の張られてありぬ梅花藻揺れて  
ハリヨ棲む清流なれば梅花藻もそよぐがに咲く醒ヶ井の里  
水源地に地蔵あまた作られて赤い前垂れ澄ましておりぬ  
醒ヶ井の居醒の清水は湧き水よ川の中にも尻冷やし地蔵  
醒ヶ井の本陣とう料理屋へ案内されて昼飯とせむ  
鰆料理和食にあれば酒呑みぬ「七本槍」とう地酒のうまし  
本陣はさすが風格床の間に壺の飾られ掛け軸に讃

## 永塚節子 友垣

・銀

六十余年越えたる友垣共通項のあまりに多く話は尽きず  
次々と繋がりてゆく人と人知れば知るほど縁は不思議  
美術館めぐりを約す秋風のそよろ吹くこりますは箱根へ  
久久の話に昂ぶる結果なり血圧計の数字におののく  
病欠の理由はコロナと話す人距離を取るは過去のことらし  
旧盆の東京駅の構内はマスクを付けぬ人々  
ひつそりと息を殺らし身辺を嗅きまわりいるコロナウイルス

## 仲西正子 台風トンボ

・沖

のろのろの台風六号予報図に三度のスーパー買い物疲れ  
人々に習いてわれは初に買うUFO焼きそば孫はよろこぶ  
初めてのUFO焼きそば九歳がほぐしくれたり台風の味  
わずかなる入荷のパンと言われば一つ追加す台風の隙間に  
台風の目の中にいて運ばれしウスピトンボ沖縄の空  
群れて飛ぶ台風トンボ置き去りに南のくにへ帰れぬものを  
台風に持ち去られたり県産のゴーヤー空っぽスーパーの棚

中 村 博 子

歌詠み継げる

・ 漢

ば ぱ り ょ う こ

そ れ は な り ま せ ん

・ 鹿

脳内のクラクラ揺れるこの日ごろ京都は三十八、九度

沸騰化地獄の異変の京の夏八代のうつし身委ゆる

下手な歌詠み雜心の振りどころとなす半世紀「辞めたらアカン」

昭和から平成、令和と詠みきたる引きままにわれも歌人や

日常の歌ゆるゆると涌ききたりわれ八十代の歌並べゆく

躊しぐれ激しき中に霍公鳥細く聞こゆる「トッキヨキヨカキヨク」

中三の最後とならんクラス会誇わんとして受話器を握る

西 堤 啓 子

朝の虹

・ 天

湖わたる風に吹かれて向日葵の大き貌ふる背うごとく

駐車場のブロックにもたれいる猫のいのち愉しむ眸空いろ

私も見た朝の虹 ウエザーニュースに画像投稿の人とつながる

行きづまり進めぬときは眼裏に鋼きらめく快刀乱麻

刈りやらぬ草の暴れて手に負えぬ人と暮らし酷暑窮まる

ひとりで悩んでいてはいけない 朝顔の大きく聞く背あざやけし

考えぬやさしき羊 狡猾な狼は死地を用意している

萩 葉 子

百日紅

・ 銀

3Bの鉛筆三本けずりおえルーリーフに歌をまとめる

百日紅の薄紅が満開 娘の誕生にいたいた樹

世界一美しい村の案内図 晴れた秋の日皆で歩いた

父親の自転車で覚えた自転車のり男子高の裏門の坂

運動会のおゆうぎは「カンナ」カンナの花を知らずに踊った  
つばひろの帽子で歩いた道はるか 泣おさえて練道行き交う  
起床時間をセツしてわたしが私に「おやすみなさい」

浜 谷 久 子

夏休み

・ 地

注文の餃一尾の届く日は子らの来る日となつて分け合ふ

これニセモノノ? 餃食べつつ聞く八歳本物そっくり土用の話題

ふるさとの友らと遊ぶ十一歳現地集合止まらぬ動画

孫友の母とLINEに繋がれて約束場所へ車走らせる

炎天の続く日狩り出す三男の子ホースでバケツで畑に水遣る

大洗濯食事作りも爪切りも子らとの時間あれよと過ぎる

欧洲へ翔び立つ子らの三週間それぞれ何を見て来るだろう

檜垣 美保子

晩 夏

・ 鳴

燈籠に灯をともし戻るひと待つと言ひけるははのならいを真似て

宵の口石燈籠に灯を入れて人待てばいっぽき飛ぶ黒蝶

いちじくの季節のくればまっさきにおもうははなり明日会いにゆく

木洩れ日に幻惑されていることく黒揚羽地にちかく飛びつ

拓植の木と椿をつなぐ蜘蛛の巣をこめんなさいねと壊し入りゆく  
泣くほどに笑い転げし昨夜のこと笑いすぎすこしかなしき晩夏  
くさはらにささやくように風が吹きそのさざなみの只中に立つ

福田庸子 暗闇坂

・今

船田清子 季やゆく?

・天

暗闇坂のぼりつめれば藤棚の日影にしばし名残りの夏を  
幼き日アイスクリームをせがみとおもかげゆる不二家の店に  
車窓占む太き月あり高温の地球の放つ熱反しきて  
コーナーリング要注意です 運転の癖をキカイが我に指示する  
さまざまあふる縁を放ちたる檜枝岐村をおもふ夏の日  
檜枝岐民俗誌を再び聞く夏四たびの訪ひをふり返りつつ  
たそがれの色を放てる穂をのばすゐのころ草の捉ふる秋は

藤田美智子 大柳

・新

両腕を伸ばして君と大柳を抱きし日ありき夏空の下  
なにゆゑにくちびる強く噛みぬしかはつかに残る夢の輪郭  
塗り直すほどに画用紙の傷めるを効きこころに悲しみにけり  
群れが苦手は鳥にもゐるや遅れ飛ぶ一羽に急ぐ素振りもあらず  
朝顔の笛ほどける頃ならむ二十三夜の月の明かりに  
氣をもみてすぐ走るわれとめつたには走らぬ君と共に生ききぬ  
朗らかに昔語りを繰り返すわれを娘と判らぬままに

藤森巳行 クルーダンス部

・銀

久我田鶴子 わわわわわ

・羊

久々に晴れわたる空広こりてマッサージの後の体や軽き  
シャーチャーとかしましまき中ジリジリーと鳴く音は二匹今年の初音  
この二匹雌雄であれと念じたり七・八年後の新生希び  
益過ぎて熊蟬の声はだと絶えほしままなる鳥かしまし  
八月の末ともならばミンミン蟬よ一匹なりとも初音聞かせよ  
熊蟬と入れ替はりにて鳴き出づるリリリリリーの音今年未だし  
チンチロリン 生駒山頂車窓より聞きし音色よ今やいつこに

本元由美子 花火

・岡

父の背に初めて見上げ街花火の人波はみな上を向きをり  
をとめこの人恋ひ初めし夏花火 しこきの帯も花火の模様  
華やかに闇空にさく大花火 人それぞれの想ひを吸ひて  
子育てを終へたるころの遠花火は厨の窓にうら淋しかりき  
幾ばくの花火のはぜしのちの闇やがて人らはさびさびと散る  
古家の座敷を透る蟬しぐれ 紛れる風鈴に妣の声を聴く  
ひたすらの命の出でたる蟬の穴盆の朝の裏庭にあり

青春の真つ只中の君たちよ舞へや踊れよ創大クルーダンス部  
撮影とカメラ持つこと禁じてる権力と闘ふダンスストーリー  
取り締まる官憲役のダンサーは迷彩ズボンを着して踊る  
官憲と闘ふ若者大空に拳を突き上げ自由の乱舞  
ステージで踊る我が孫のDNA妻繫がりと確信をする

両親に冥途の土産によく見よと孫のダンスに娘は言へり  
五十二名の部員をまとめ発表会大成功の孫と握手す

## 内 在

久我田鶴子

いちばんわが内在にうかびたり塞上の胡人辺風に佇つ  
「離離航海」

「わが内在」と言う。「こころ」とか、「たましい」ではない。ただ一筋に「わが内在」に浮かぶのは、「塞上の胡人辺風に佇つ」。下の句は漢詩になつてゐる。

「塞上」は、砦のほとり。「胡人」は、中国で北方、または西域の異民族を指す。「辺風」は、辺地に吹く風。中央から遠く離れた辺地にあって、風のなか、砦のほとりに佇つ異民族。いちばん思い描かれる憧れの姿だ。

年譜によると、小学生の頃から白楽天の「長恨歌」を暗記するなど、漢詩への興味を持ち、唐詩選をはじめ多くの文学書に親しむとある。小学校を卒業後は日本郵船に入社し、浅間丸に乗船。そこで図書係となり、読書や詩作を続ける一方、書道を始めるもある。漢字や漢詩、さらに文学や哲学に向かう思いは、かなり早いうちから並々ならぬものであつたことが窺われる。

歌集「離離航海」の表紙をした画家の田中岑は、三好直太への追悼文（「地中海」昭和五十年十一月号）で、この歌を挙げて、「辺風に佇つ塞上の胡人が直太の内在とかかわったと直太は咏う。直太の内在は伊豆富戸の常世の里か。富戸には山の神も海の神もいる。海の神は、神靈様。女の神様で、一ヶ所にじつ

としていない神様だそうだ。そして、人間の影のように漁師や船頭について廻る生き神様だが目に見えぬ。……（以下略）と書く。一ヶ所にじつとしていられないかのような直太の性分を、田中岑は「直太には船靈様がいた」と見たようだ。さらには、「塞上の胡人は、そのとき直太。大観に『屈原』がある」とも書いており、横山大観が描いた屈原の像に直太を重ねているようだ。ここには画家のロマンを感じないでもないが、「辺風に佇つ塞上の胡人」とは直太自身なのだと、うなづけるには大きいに頗る。

歌集の終わりに香川進が、歌壇ジャーナリズムが百首詠、五十首詠を依頼してきたときにも直太は何かの口実をつけ、それには応じなかつたということを書いているが、「塞上の胡人辺風に佇つ」の人であれば、それは当然のことだつたろう。

「離離航海」よりも前に、三好直太には合唱歌集「群」（昭和三十三年刊）がある。その作品タイトルは「涯（はたて）に生く」であった。ギリシャ船から送られた作品群で、日本から離れた涯（はたて）に生きることだろうが、涯（はたて）に生きることは自らに課したことであり、自ら選びとろうとしていたことでもある。

目とすれば潮の音つよく響くのみわが内在にあふれくるま  
で

ゆるやかに高麗芝のすがれゆく踏めば内在ゆうぐれんとす  
後の歌は、ギリシャ船より下船後の歌。伊豆高原のゴルフ場造成に現場主任として従事した。高麗芝を踏みながら「ゆうぐれんとする」「内在」をうたう。

## 日常の切り取り

### 改正 大祐

上達は数字で

# 今月の二人

道すがら挨拶されるマスク越しこつちは5類マスクを外し  
マラソンは練習積めば裏切らず短歌はどうか詠めば詠むほど  
本当の目的見えず観戦へ勝ち負けよりもビールがうまい  
早朝アメリカからのホームランいつまで続くニュース速報  
いつの間に切符の値段上がった気付かずいつも改札にピッ  
まあいか運動したしもう一杯飲める理由を日々探し出す  
さあどこへ旅の醍醐味それに一期一会が旅の魅力  
扇風機形は変えず大きさが今は手に持ちハンディタイプ  
いつものでそれで通じるあのお店居心地よくてついつい長居  
いつからか目覚めの時間が朝早く寝だめ二度寝はなかなか出来ず  
ビアガーデン乾杯同時陽は沈み過ごしやすくて杯を重ねる  
浜風にひらめく旗は甲子園ビール片手に試合は寒い  
朝起きてだいぶ後悔一日酔い楽しさ勝って飲めば忘れる

「山桜の会」を主宰している永田氏、いや永田進一先生。実は約三十年前になるが、高校で現国を教えて頂いた。同じ市内に住んでいることも、当時から知っており、高校卒業後も街中でお見かけすることも度々。今回」とあるご縁で月一土曜の午後に開催される短歌の会に入ることになった。毎月思うのが三十年の時を超えて、現国の授業を受けているようにしか感じないので、ただ高校の時よりは眞面目に受けているのは確かである。初めに先生からは思つたまま短歌は詠んだらしいと言われた。これがなかなか難しい。さて、十五年前からマラソンとゴルフを始めた。初めてマラソンを走った際、ちょっとは体力に自信があったのだが、打ちのめされ、やつの思いでゴルした。ただそれが悔しくて前年の記録を超えることを目標に走っている。マラソンは練習をすればするほど裏切らず結果が数字に表れる、ゴルフも同じである。数字に表れるものは上達を感じやすいが、短歌の上達は数字に表れるものではなく、自己評価が難しい。詠めば詠むほど上達するのだろうか。きっと、それは神のみぞ知つてい

母

堀口 良雄

詠み切る

立ち上がりふらつくたびにすがる棧障子を杖に老い生くる母  
再発はうつつならむか曾孫抱き黙り込む母失語は悲し  
脳梗塞母の腕まだ動かざり触れて温め摩りて念ず

病ひの自覚ながらむ母はデザートに混ぜ込む薬ぶつと吐き出す  
コロン買ふ夏来たらし失語なる母を抱けばにほふと言はるる

厨にて用を足さむと迷ひる母の手を取りトイレに誘ふ  
花野原畠を覆ふ紙おむつ庠みに堪へ兼ね母千切りけむ

母が夜にトイレに立たむ時刻なり温き湯まりは探る手待でり

立ち得ずにトイレの助け待ちし母気弱になりて施設諾ふ

夕暮れは寂し認知の力落ちマスク取りても母は気付かず

母寝ぬるソファは広く長長し仰向けになりうつ伏せになるも

青田行く自由はありや母のゐる青田の施設錠されをり

生き切るは詠み切ることと介護する子にたまきはる命見する母

以前、四国八十八か所を巡礼し、結願した後、高野山にお礼参りに行つたときのことです。十数あるという堂塔や奥之院の神秘的な空気に感動しつつ境内を歩いていると、横断幕に「生き切る」と書かれた文字が目に飛び込んできました。いまをきちらんと生きる、生き切ることが大事だというのです。当時、五十手前だった私は少し迷いが吹っ切れたような気がしました。

数年後には父の看病、そして母の介護に明け暮れる日々がやってきました。母は八十をすぎて脳梗塞を発症し、運動や感覚に障害をきたす麻痺や言語障害、さらには認知機能の低下などの後遺症に悩まされました。初めのうちは姉の力も借りながら妻と自宅で介護していましたが、仕事との両立が次第に厳しくなり、平日は施設にお世話になることになりました。

週末の一時帰宅は、母には勿論、夫婦にとっても、互いの絆が深まる掛け替えのない日々となりました。國らずも「生き切る」日々を母からもらつたような気がしました。そして今、母の短歌を詠み切ることで供養に似た不思議な安心感に包まれています。

## ◆今月の二人・改正大祐作品評◆

## 朝起きてだいぶ後悔

## たまきはる命見する母

評者・久我田鶴子

改正さんは、生駒市在住。高校の先生だったグループ長の永田進一さんの教え子だという。

・マラソンは練習積めば裏切らず短歌はどうか詠めば詠むほど練習の成果がはっきり分かるマラソンに対して、始めたばかりの短歌はどうだろう、と思っている作者。結句の「詠めば詠むほど」に続くのは、「上達するのだろうか」か、「難しい」か。初心のワクワクも感じられる。

## ・本当の目的見えず観戦へ勝ち負けよりもビールがうまい

「観戦」は、野球観戦だろうか。観戦しながら飲むビールのうまいこと。そうなると、やってきた目的は、試合の勝ち負けよりもビールを飲むことになっていたりする。

・いつの間に切符の値段上がつてた気付かずいつも改札にビツ確かに、改札にカードをタッチして通過するようになつて、切符代のことなどあまり気にしなくなつてしまつて。改正さんが値上がりに気づいたのはいつだつたのだろう。

・いつものでそれで通じるあるお店居心地よくついつい長居「いつもの」と言えど、それだけで通じる馴染みのお店。居心地が良いので、ついつい長居してしまう。長居をすれば、つい飲み過ぎてもしまうというもの。「あのお店」と言つているところを見ると、長居の後悔の歌らしい。

・朝起きてだいぶ後悔二日酔い楽しさ勝って飲めば忘れてこちらは、「日酔いの朝」「だいぶ後悔」とは殊勝だが、でも結局「飲めば忘れて」、またまた後悔、ということになるのだろう。笑ってしまうが、それもまた楽し、である。

堀口さんは、熊谷市在住。脳梗塞を発症後、さまざまな後遺症をかかることになった母の介護を妻と一人でしている。・病ひの自覚ながら母はデザートに混ぜ込む薬ぶつと吐き出す

・デザートに混ぜ込んだ薬を吐き出す母に、病の自覚がないのだろうと思いつついる。「病ひの自覚／なからむ母は」と、字余りで始まった初句。二句目の言葉運びと相俟つて、母の置かれている現実に読者を引き込んでいくようだ。

## ・花野原を覆ふ紙おむつ痒みに堪へ兼ね母干切りけむ

「花野原」。なんとそれは、母が干切った紙おむつが畳を覆っているのだった。目前に広がる現実は厳しいものながら、「花野原」と表現している作者に目を瞪る。「けむ」は、過去推量の助動詞。痒みに堪えかねて、母は紙おむつを干切ったのだろうと想像しているのである。

## ・母が夜にトイレに立たむ時刻なり温き湯まりに探る手待てり

母の湯まりの温かさ。それを探る手を待つていたのかと、夜の介護を辛いものとは言わない。温かいのは、母に寄り添う手の温もりでもある。

## ・生き切るは詠み切ることと介護する子にたまきはる命見する

「たまきはる」は、「命」の枕詞である。介護する子に、自らの命を見せている母。この母を詠み切ることが、自分が「生き切る」ことに繋がる。そこにあるのは、作者の介護に対する覚悟であろうし、母に対する感謝でもある。

短歌との出会いを辿るにあたり、三十数年前に遡りました。

神田鈴子様のご主人様のお参りにお宅を訪ねた時のことです。ご主人様の闘病記をまとめられた冊子「あちさる忌」を戴きました。それが初めての短歌集というものとの出会いで、深く感銘を受けました。

常日頃、四季折々の自然や日常生活のさまざまな情景を止めておけたらいいなと思つていました。けれども、時代もあつたと思ひます、これからは英語が役に立つときが来るという母の勧めで、短歌や俳句とはほど遠い生活を送っていました。

それが神田様より短歌を詠んでみませんかとお説いを受けた時には、なんの知識もないまま簡単に地中海に入会したいとお願ひしてしまいました。

それから、故奥田清和先生を御紹介いただき、その後数十年、奥田先生のお宅に月一回お伺いし、ご指導を仰ぐことになりました。先生には国語教師のご経験から、昔のことや短歌の知識、歌の詠み方の基本など、沢山のことを教えていただきました。

私が大阪文社に入会させていただいた頃は、三十数名の会員がいらっしゃいました。現在は、なにぶんにも高齢化に伴い、二十数名足らずになりましたが、若い方達の活動もまた、なにぶんにも高齢化に伴い、二十

躍も素晴らしく頼もしいかぎりです。

奥田先生の後を、牧雄彦様が大阪文社長となられ、行き届いた御指導のもと、月一

回の例会が現在も開かれています。

今は自分の力でなんとか続けていますが、歌材を探し回っているうちに一ヶ月が過ぎてきます。幸い我が家周辺には川があり、緑があり、公園などもあり、自然と親

## 私と短歌との 出会い

255

西畠 瞳子

めたらいいなと思います。

私のただ一つ誇ることは、欠詠をしていないことです。それもいつも大阪文社の会員の原稿を取りまとめて下さっている方（現在は高尾恭子様）のお蔭です。お世話になります、ありがとうございます。

そして、私自身が歌を詠める環境にあつたこと、健康であったことに感謝しています。これからも少しでも良い歌が詠めるよう努力していきたいと思っています。

失語症の母の辛さを思いつつ笑顔を交わしあいづちを打つ

母の介護の後は、夫の両親、私の父の介護。また、その間に起きた阪神淡路大震災で両方の両親が被災したこと。その頃のことは心の中に今も強く残っています。

家崩れし親なぐさめんと好物をリュックに詰めて線路を歩く・ポートアイランドの孤島の父へのアクセスは並んでかける公衆電話

私の歌材は、家族・日常生活・旅行・自然と、主婦の目線での歌が多いようです。最近は加齢に伴い、行動範囲も狭くなり、変化に乏しくなりつつあります、子供達や孫達の新しいニュースも入ってきます。

めまぐるしく変化する世の中についていくのも大変ですが、違った目線からの歌が詠めたらしいなと思います。